

つたいけん ア・ラ・カルト

冠省 昭和 32 年(1957)文理・政経卒の愚生は辛うじて就職できたものの光陰人を待たず、ハッと気づいたときは定年でした。そのあと元勤務先の委嘱業務が続きましたがこれも十年ほどで満了。

ここまでは仕事への対価、つまり多少なりともカセギがあったという意味で便宜上“実体験の時期”と呼ばせていただきたく存じます。

では、その後は何の時期でしょうか？各位なりに様々と存じます。ひょんなことから愚生は“追体験の時期”と呼ぶ場合がございます。

追体験という言葉に接した TP0 は忘れていたのでありますが、初めて実感させてくれたのはトルストイの『戦争と平和』でした。文学にも疎く、自己流のまま読み終えたとき、ただ感動したというだけでは気持ちがおさまりませんでした。ダイナミックな感慨に包まれ、ふと、“追体験したのかもしれない”と感じたのでございます。

ご周知の通り、『戦争と平和』はトルストイ(1828-1910)の最初の長編小説といわれます。内容も実に長大、1805 年 7 月に始まり、1812 年 12 月のナポレオン軍モスクワ壊走まで 7 年半も続きます(日本史では幕府がロシアの通商要求を拒絶した年から水戸家による大日本史献上の 2 年前までの期間になります)。

『戦争と平和』は半分近くが戦争場面、その多くは野戦。そのつど最前線で砲弾の炸裂音に身をかがめ、硝煙を嗅ぎ、重傷者が蠢く野戦病院の天幕にも入ったような気持ちになりました。自分の戦争体験はゼロなのに戦場にいたように感じてしまったのでございます。

余談に相成りますが、太平洋戦争末期の昭和 20 年(1945)、国民学校(今の小学校)上級生の愚生も B29 が首都圏空爆のあと鹿島灘に向かう編隊は何回となく見上げました。また、ゼロ戦が(現在の茨大農学部キャンパス辺りにあったという旧海軍霞ヶ浦航空隊基地から発進し)高度にも勝る B29 を追撃する機関砲も耳にしました。このように戦争の実体験はゼロなのに、『戦争と平和』を読み進むにつれ恰も野戦の渦中にいたように感じてしまったのであります。

実体験との関連にて申し述べますと、勤務先の仕事で初めて会ったロシア人は東京駐在員一人だけ、次は都内工場で精密技術研修グループを見かけた程度。ナポレオンが英墮連合軍に大敗したワーテルロー古戦場だけは旅先で地上に立って眺めたものの場所はベルギー、時はナポレオンのロシア遠征敗北から 3 年あと。そのあともロシアには出張も旅行もゼロ、つまりナゾの国でした。ナゾに興味をそそったのか、定年後はロシア文学も少し読むようになり、やがて『戦争と平和』にチャレンジ。ところが、読み終わるまで十ヶ月もかかりました。

『戦争と平和』は岩波小辞典西洋文学(桑原武夫編・1956 年版)によれば長編歴史小説ですが、読了まで十ヶ月もかかった事情は多岐に亘ります。その一つは幾多の戦場確認。会戦初期の頃は、チェコ・オーストリア・ハンガリー旅行の際に集めた全国地図が頼りでした。が、露軍は後退を続け、やがてロシア国内が戦場になると重宝したのは付録地図。村・河川・山野まで詳しく載っていて大いに助かりました。

他方、5 百人を超す登場人物のうち主要人物ぐらいは家系図式に整理して相互関係をクリアにする必要も生じました。また、辞書や訳注・年表などとの照合にもかなりの手間と時間がかかりました。

ところが、習うよりは慣れる、このような副次的な作業のお陰でロシアに長期滞在しているような気分すら生まれ、むしろ“追体験”のプラスアルファになったような気がいたします。

いずれにしても、トルストイの人間描写力、つまり文学としての質が追体験を感じさせてくれた第一の要素でございます。が、量感も否めません。即物的な言い方はトルストイに非礼ではありますが、“文量”にも圧倒されたのでございます。率直に申しますと、ロシア語はアルファベット一字すら読めません。邦訳では言語・民族・宗教・地勢・距離感などの点で必ずしも利あらず、しかも文庫版分冊合計 3 千円前後。たまたま丸善本店洋書バーゲンで仕入れたパーパーバックがツンドクのままでした。この英訳版(War and Peace, Oxford World's Classics・300 円)は堂々たる構成でありまして、編訳者緒言・訳注・戦場詳細地図などを含めると凡そ 1400 頁、6 センチほどの厚みはパーパーバックの英文学 2 冊分に相当します < サッカレーの Vanity Fair (虚栄の市) と オースティンの Emma (エマ) >。このような“文量”にドン・キホーテよろしく突撃開始、サンチョ・パンサなしの孤軍奮闘十ヶ月。

ところが、『戦争と平和』を読み終えても「追体験」という言葉の本来の意味については知らぬが仏でした。気になり広辞苑をひいたところカルチャショック。語源はドイツ語 *Nacherleben*、意味は“他人の体験をあとからなぞり、自分の体験のようにとらえること。”この説明では愚生の石頭にはムリ、まるでロシア農奴が陥ったような閉塞感に囚われました。

が、同窓会に助けられました。今年6月、十数人の同期懇親会（横浜）では和気藹々に終始、教わることすら忘れておりました。次のチャンスは7月の学部同窓会総会（水戸）。懇親会同席の畏友二人は専門家、知らぬは一生の恥、即座に教えを請いました。幹事役の現役教授も手ほどき下さいました。

ところが、水戸から帰宅後に元の木阿弥。石頭をかきつつ横浜市立中図書館までヨイショ（1860年に桜田門外で斃れた井伊大老の銅像も建つという野毛山中腹）。館内の女性スタッフがワケを察知、哲学思想事典まで案内してくれました。「追体験」という項目もあって、ドイツの哲学者デイルタイ（Wilhelm Dilthey・1833-1911）の用語、と明記あり水戸特訓が蘇り始めました。更に、同じ館員が検索ヒットしたという書物を開いて持ってきてくれました（『なぜ歴史が書けるか』升味準之輔著・千倉書房2008年初版）。

開いてあったのは第一章「史料と追体験」ですが本文よりも引用文の方に興味を感じました。引用文の著者はコリングウッド、初めてのお名前ゆえ事典をひいたところ、R. G. Collingwood (1889-1945)、英国カンブリア生まれ、オックスフォード大学哲学教授歴任、歴史哲学の著作多数。

カンブリアには愚妻と一周した湖水地方があります。また、オックスフォードの街にはロンドン在住時代の愚息夫妻がドライブ途中に立ち寄ってくれました。千載一遇、クライスト・チャーチぐらいいは見ておきたい、と守衛殿に頼んでも所定時刻過ぎゆえダメの一点張りでしたが翌日はOK。1525年創立というカレッジは古色蒼然、教室内も覗きました。街中は学園祭で大賑わいなのにキャンパス内は人影まばらの別世界。

これだけの微々たる実体験なのに地縁みたいなものを感じ、手元唯一の資料を開きました（*A Social History of England*, Asa Briggs, Penguin Books）。残念、*Roman Britain* (43-410年、大半がローマ帝国の一部であった頃のブリテン島)に関する学説を要約しているだけで、目指す「追体験」は見当たらず。

幸い図書館にはコリングウッド著作の訳書がありました（『歴史の観念』、小松茂夫・三浦修訳、紀伊国屋書店2002年復刊）。まず、前掲書（『なぜ歴史が書けるか』）は“追体験という言葉をはじめて用いたのは、ヴィルヘルム・デイルタイだろうか”と述べていますが、コリングウッドはデイルタイを世に顧みられぬ孤独な天才と述べ、「過去の経験の追体験としての歴史」と題した一節もあります。

加えて、図書館には原著もありました（*The Idea of History*, Clarendon Press, Oxford, 1993）。素人なりに照合したところ、「追体験」の原語を見つけました。然し、その英語 *re-enactment* はコリングウッド独自の概念を表す用語なのか、*Nacherleben* の英訳語なのか、などは分かりません。

いずれにしても、折角コリングウッドまで辿り着いたからには何とか利用したい。まず、自己流に解釈しますと、コリングウッドは第五部・結論（2）「歴史的思考の分野」にて“追体験”の概念を要約しているように思われます。

この解釈でよいのであれば、『戦争と平和』はトルストイ自身による偉大な追体験の集大成、と申してよろしいような気がして参ります。もしそうであれば、愚生は“トルストイの追体験”をなぞっただけ、ということに相成ります。

ではありますが、ここで“追体験”にサヨナラするのは惜しい。そのように感じた頃、「追体験」はコトバとしては日常語化しているらしい事例を書店内で発見しました。大辞典だけでなく日常的な中型国語辞典も少なからず載せているのであります。更に、“作中人物の哀歎を追体験した”という愚生には好都合の用例まで載せている和英中辞典も見つけました。何と、同じ辞典が自宅にありました。コトバとしての追体験に初めて接したのはこの辞典かも知れません。もしそうなら、ドン・キホーテに笑われそうな灯台下暗しですが、辞典執筆者は『戦争と平和』を読んで追体験していたのだらうと思いたくなります。そう思うと、世の中がいつそう楽しく見えて参ります。つまり、「追体験」を象牙の塔から開放し、気楽に身近雑事にも応用したくなるのが人情、と思ひ始め



(立石寺)

たのでございます。

例えば、卑近なことで恐縮でございますが、今年の七月初旬、蔵王温泉格安ツアーの道中、オプションにて立石寺に詣でました。この寺まで来たからには、句作にも縁のない無粋者でも芭蕉を追体験するマネぐらいはしたくなり（コリングウッドの用語を拝借すれば re-enact したくなり）、山内随一の展望という五大堂まで石段を八百ちかくヨイショしました。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声 から三百余年経ても岩は山中の至る所で見かけました。が、聞こえるのは石段をヨイショする善男善女の声ばかり。風も通らぬ蒸し暑い山中、湧き水は多いのに樋は見えず、顔を洗うすべなく、ふと思い出したのは人一倍あせっかきの旧友。



写真: 高田平二様提供

この旧友は茨大同期ですが中学時代から俳句にいそしみ、今年は『俳人・高野素十とふるさと茨城』を上梓したほどゆえ「山寺」も訪れたはず。そう思って便りを出したところ、やはり還暦の頃に登った由。これは追体験の延長線、と申したくなる一齣でした。

もうひとコマは初孫のサッカー。彼はロンドン生まれ（とタイムス紙通例の出産コラムに載りました）。英国はサッカー発祥地と言われますが、そういう地縁かどうかは別としてこの孫はベビーパンツ時代からボール遊びをことのほか好み、小学6年間にはサッカークラブ。いつの間にか中一、部活はサッカー、身長は伸びて鴨居では頭を少しさげるほど。今夏は2、3年生主体のチームに入れてもらい、週末は市内中学勝ち

抜き戦。試合の電話が入るとジジは電車・地下鉄・バス・徒歩でグランドへ。

ところで、今年のワールドカップ南ア大会決勝トーナメント緒戦でイングランドはドイツに惜敗。その翌日（6月28日）、ロンドンタイムス紙第一面トップの見出し Eins, zwei, drei your eyes はドイツ語まじりの憂さ晴らし秀作と見受けましたが、孫の中学は勝ち進みました。立石寺から戻った週末二日間は特に快挙。左足キックがダイナミックに伸び、ジジも蹴ったように気分高揚。ヘディングで大きくクリアするとジジの石頭もインパクトを“つい”体験した気分。どちらも錯覚の仕業にすぎませんが、現実のベスト32はレギュラー選手二人の負傷もあって突破ならず、悔し涙は実体験。

最後に前世紀中葉まで大きくタイムスリップしますと、昭和30年(1955)ごろの茨大水戸キャンパス屋外ではコーラスも盛んでした。ロシア語で歌う学友もあり、“カチューシャ”が耳に蘇る遥かな青春の追体験。

頓首

2010.10.1 記
文理政経5回生
高田平二